出世娘（しゅつせむすめ）後編（こうへん）



京山作
國貞画

出世娘（しゆつせむすめ）振袖日記

京山作

國貞画



序

文化巳のとし家兄京傳が作に、おなつ清十郎の赤本をまなびさぞろ是も清十郎おやなじ糟がよう、似たる筆の糟小船にのりて、おなつをのせて、花の清十郎が櫓をおさをまよはして傳へし、昔唄古本屋乃故を温て、當世芝居のあたらしく、書綴つたる物語で、ま勧善乃全六冊丁数まづ少か小冊なれど、清十郎も夏のみじか夜に、蓙闇仕事の蚊帳の中、文ハ元来拙けく、かきながしのおもむきハ三本たらぬ戯作者のあさらまくで、ほんのまちがひかなづかひさへも、さむらふで御免しておくのハ、おみさ緩がされ讀ふてあつハいかが筐なり

文化八つのとし

辛未の秋

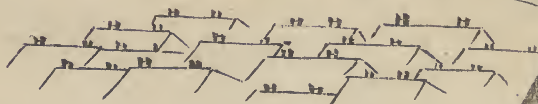
山東京山誌



蒂頭蓮花



鉄心石膽



○女非人野わざみのお花

雪滿山中高士臥
月明林下美人来

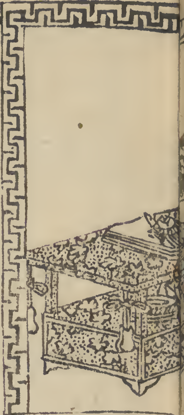



○入間家の忠臣　長橋渡

岩根御前

▲うさ衣の
うちだ
かくし
びい
どろ
そのあり
きれ
ちり
ようび
かくる
ゆくざ
いひの
その手れ
とらのかど
六千に
ちりきさ
女

守れあ手な
手代とある
ひろざんの
袖と
ひろく
「これやし」
書のまえる
うずまや乃
だんとう
ぐん八さま
今あるさの所へ
おくりまて
まゐる
ところ



むかしくゑんゑいのころかひがしくにの
さんゑんはる八今まつりやしろあれて
かるよふ世のよすがうちつゞいてざしぬ
みよのうしさぞかりけるそくせつ
何でもつて仕ゐとべんけい八じめちうの
ひろいとわちい三まんのみべつれ
むかしむかし乃きのめのゆりゆるのゆるゆ
岡れわれ幸名のゝこたへわるれ
わしかれておのづりきかくとまれく
りくをとぶたいら乃ひろこたじむかゆのぞ
のやをとうすべてかん所のいのちわつその
氷おや座の世をあり給ひしてやかん乃
ひろうとわでやうも一本づゝ乃かなれ
つきれもかうなれどもよにぢうれはんせぞ
べびかの世りのかくべび給つくべども
ものれはさつれへひとつりどくをそう
ひめかくとおもまうかしどきかうむへる
やとまうか子どもきかつがん乃うとへ
るとをるか大人の山紙かしさる志べる
ひゞくとさけべがおんとつかうそうつ人まれ
そうあんのきうりハえるかのぞむふ
さんのうんなかはちらく月のとのなさの
きんどの玉とふぶり　もうか行ヘさるの
白びかりしのつんとしうる八ろんきの

▲

三ぶの
ひろう
ふなのひて
もとで下ど
十七すりさがれ
にせまやくも
あの子のうけて
此ろうづらよひ目に
あふて百年も
いきるつかり
あの仏あくしみれ

さるおれさ
くうう
おてら行れかゞへりふのでて
あれろうう
にはまん水金五十両
名ぐさまえにうけとるなり
以下つゞく

そうよくられゆて
お目にかゝりまして
きつさんながにくじが
さくらくださらうか
まづをそらくござり
ましようぞおかりの
ちやうせもおくへ
わろくゝつてござんけ
さてわろのてても
ござりますそれ
わたしが樫の
お菊のかたをも
うゝい
よふて
ござる
ようを

鎌倉唐土が原花水橋の

さるのひ
きやうげんい

より



景色（けしき）
ひの薬
大平
涼

ほんに　くひ　おまんが　此五十　両を

そんな　ことの　おやく　にさ　せへ　されども　ゆびハ　させやせぬぞや

へ女のさいかく　まそおかねが　いろんさんすハ　きさくぬぞへ

清

夏

ゐてお前がせ玉江もまてゝござるゆゑとあるおかたがたと
とそんぶんのうせて代のぶん八「言はまでいふおかたのその
五十両のちゝまでに代がん六ちつうして申うて名けの
そうたいりしれおそれちかいそうれぶんのおり人
おしだしてきめちいさいおのおみつけつゝおするよ
おそれてあるまじがせおへしてうちおみさんにハ
よろざけのみせとろうづうにあつまつきせ五十両ハ
のちゝうにとやくそくしてけりれそり
○かくてかん八ハおる川がそれくらうづう人へ五十両を
のちほとやくそくせしが五十両ハさる苑文字のの
金もあてがなくいろいろせんとせしがまづ二ぶいのんで
ひとまづあんしんなどと思ひつゝまちゐるや否の二つの
よわりあつてきたるので言るものもぜひなくのたまつそ
わるたぎこびんとにむすび金のさいかくくらあのつ言あ
さしたの女のこゑひそくとけ言しするやどうやらおるらが
こゑでくるのをまいのぶきるのかよおをまてゝのぞの
それがおる川と見るがむきうが来てりきて男あら何やら
おやとうちみのあわんへ申入りけて二ぶだらうおけそ
のぞのそ見れだらしろすがられわくれねどなりつきの
あろいところ代にハあしいなどの人をハ子がふるとよ
あいかくさいの清十らくきゐつおる川とはけハとあろ
うなされいきくのそおまが人をうなられよがれ江らしさ
とそろ見なこそそきいつれずんとうろいしきかれ見ちあら
さんハそれがいやくずきま江をうもえ氷きうんと
かくろみれ言ぶつけいとき氷こにろしてみそうなりおくとえ
さうれあつてその物まやが清十がうひざえりしれつきべ
ふみそでおもしたさとをかりさる物言きくさ見へおそうけに
でしよことてかくきろながつれておりんに貝見へさせ
いんぶさとおきてに入てけきそのおの人へのさむつういが
きそて目にりかしにぶずがはみ子あともうとのてと
まつてのとるりのかくきみりきつくやうにさろあきえて
あのわせぬのろけがうへをまだんとのめのきる

三冊めへつゞく

大きにこれハおまへのおかげじやにの がん八ハいつもいふ
そうぐづ〳〵としまするより がん八ハ今ハ母かさんへ
こうつきはしてけふ〳〵とせかせますゆへ これかりて
とてもきらくにしてハゐられぬそれ故にまづかうしてかくさるの
ろうそく茶さへひとつ町手をとぢ身をよこのを
料茶おろ〳〵ましておきえんをまぜまし ことも
ゆう〳〵給をおしてつれてのので
あらう事ばかりかんべうしてくだされ
せまうつらしいまぶくらへるまぶ給をあて
あがりこれだ清十郎おやかれむかひ
因札ハきりとへまるのつまゆうかん
きんがわかりしいかくさぬでも
こゝのとふしうらそぞそろはぬうへ
うまの母よりおんぎんハめうの
女ハ母なくて孟のてし
「わしくどの身うれ
いふんしてもかく〳〵
こゝろをいかゝるとも
わしうのうんきとれ今うと
あつてのふげこと
衣よりしおりのおまへまでが
あんてまいなにはしへみんとなぬせうぞこと
猿れてさし あやうりけ給清十郎せうのなでさまより「気てずつてまおやく
今のみそいのいのちさの御給ののそそんさのおやめんど母の母くへのふきでよつけくし」と
みちあそこれあると今びにうけるまをふてさあれのむりうぶつて身をされだ
きてのぞくしとりのがん八びつくりしかねを母うきを給う給ひのうち
おかみへゆつくりとるく給をませおかれさまあもいまみうりしが清十郎かわ給こそ
「こいまゝのみ十まどうしてくさいらく あしく勢しくともふしんされだ清十郎「あんどかのきま
さわれかれ女やんみくそうれ すむし給つでらのそくへう飽しておのさのぶくめのうるまなわかめのあがう
母へあつてよろこくおんこもむくいおうつの卜いかそうしろうくへのめのぞかうのが

つゞきへつゞく



まへのつゞき のぶ子のまくらもとへよつてゐると人がきたれてハいちがんのくるぬよりの
めしつかへ人ほうけして見なれぬ大せつのかけじをさしわたしのさいふく
まち入りそゝくのかさ五十両とまかのしときものてよろてぶかまんそうけ金
ぞさされへお宿やれまでうきへをさやとどそろうもやかくせぬ
それはまうてうへぞうりしさとおちつて女房のきやさのむ
ともに此金入用の方ちや亭女やおかせとしをあけて
のへおありとつけませうろん
○よあつりざへひれ
さつぎくしておさ
まけがん八
清十郎がのぶ子をと
まてまちきとうるゝ
人これを見てそれ一ぶん
とられときてこれぞうれ
つけそくそ所ぶんかのうすがみ
ちよろうまくらもとむりそうち
つけふこぢつけて五十両を
こちら金子此あけおなんぞ
由へわけてしてまぶ二枚をを
かくこ封お此清十郎がめへ
五十両乃そうぞく此おとし
おれハおけなんでと
おんくかまも
うそんくと
ひとうろあゆみ
うそまふりして
あいのまのふすまをあけ
今こそうまくとあけ
そおつち「ヲアおとうだそのの
清十郎がせのう金の五十両ふんじつ
ぼろくふせられそれとゆうくさんまで
きそ見れだおの所とゆうりのうあう

先それはこなたのサア皮へいのさいふ
五千両のせんぎ致すると思ふがよいぞ
此方は清十郎きさまをだまし
詮議そうしや方のゑうぞく
さうく此方にわたせ
目まへなつといふそのせうこは
此清十郎はけん付てまへの銀さい
そのほか方より出てきたりのひぜに
さつくりよる口なへ入ゑくいふは
おのれがわひ出ひるがまへは
先くおまへすまいと申すそう
こゝの本まへくまて清十郎
ちかいおちくさなれぞ　おまへは
証拠さきわのおくさ
出れのふまつてと
きゝある状
それおと
このりが
おまへいふ
そんなのところと
つきのけてうんて
ゆくる状清十郎身をとうおそてそのまゝ状とり
是れがん八せぶうるのてござりれ五千両の
どうぞくるはこれがかんのねぞへおのれけがあり
いのてきたおやとる状はもちてよおちたがん八は
世から口てひの門のおまへそのおまへのつらうまでも
人のまへ付けたらねのかのう於れようさ五十両せサア此方がかぶらしれたとて
おもてゆるいてとおもやよんどころない入用わりてまうしがどうぞとおち入て
へいのまえく　すんだんのてぶいからこそ五十両もうらさておち　めのかみてみうう
いやぶるのおもちつ入たえのへかんじやそれぬかせとそひつかられのぶるゆの
うこのとへわけていられぬとふのとおりさこつまりくそ身のおんぎせんうちあうぞ
あんれあるがん八はかまを一こりしとおぼえもかりのとうとさへ

次へつゞく

けんぶつ曰
おちがあるぞ〳〵

すへのつゞき
〽おちや入たきすへ？んどや〽サアそれハ
〽ぬしさんなんかハ乃しやうぞく〽いやしといつて
は身におかへ〽あいかはがおちや入の
まぐさとりんぜい〽そのでござへ
今こゝに〽それもかいる
〽すいかういふく
まのしやうぞく
とでいつそへ▲

▲あさ
りう
ぬ
あれが
やどの
ちつ紙待合
田刀紙とかわる
ゆんじやと
きいさてへ
さしづめだんとう
やくなのとうめげさ
そのさへでうかの

■のれんまでか白よりくらへますかりの
そのおもて紙かつなゆきつかのおきして
ありしひうきでかくだんのおきてだ
かくおきなりゆかりになさ
かりかせがらゝまんさんの
かおだしてあるからしよ
待合どのかおやどだにと
いりきまつかうちのさかひ
おさ給へそれとみかよりも
〽これかく　おやづしいきた
けつきんいろ　おのがりてござり
ましるてかく　こちへとござんすめ
此おまへハまだきもにかゝりてう
ふたゝ。おちやめげましや
おとこさんこちへおかけ
めそこへもおちやめげろと
人がそうさぬ
あいそのハ
だうさいの
かいぎと
きつと
そう





いゑはふかくあきびの
いかゞだとおもひもとより
ゑまのうまぶのあやぞぜひも
なきそれはさておきこゝにまた
洪水がりけりあてうきつの
倩むかし人のはしらの
大がしらの人も
こそしやの男ぶ
粋の
なれへの
また
やど

「うとぶうようむさ
清十がかき
きんと
うし
うま
せう
こそ
わ
よ
げ

「そのうき
あてれ
うし)て
おつさ
そのでぶさ
さくあんと
しよ
りゃ

あがけし)にてりあきらかにむかひそれがし ばらびにしかおん
のおへやゆくほどのとゆ江戸也とうし奥女中あらへて上京
めされしそのとこそとめつしてえんりでのこゑやこゑんぶん
しようつおらうまやれかりのほどの用むきゆへう
かしら)主じんの大せつのこれこれのとくりことをおしてあんじゆんの
ぶん八ぬしにめされいさそおまへいやうあるきよわん
侍もどの住れくへおのぞのむろせられ清十がまいちいあんそ
町人にいまをつかり侍もどのへおるのとやし)ぞうりくにて
のぶりしが今でんてぞうきやへてがいがち おそるまらぞこう存し
(は)当座まそのおまへうせあにうとゆるいご安うくいをゐびよく
つしあぞうりまぞうるとときけバあきさんが「いやかめつどうう
きぶその女うらが清十さ母よいわくてそうめんを
ようしてくでさされさとしよきちまやのぶんおどのさむてい
よろしんでござりませあり あがりおいてしいしよ代
がらくくう「アやくつうのあのにんくをとりでござるると
才(は)のおもうろうど江より侍もどの八やぶれてく
かど友つうせて(ほ)代のぶん八ゆへとんづらゆく人きてうる
おきみまうらいぞ「あまんへかどとぞうしどぶん しし「ことのそが
侍千のおもうしぎしや なすしいらでまやのだんごう
ぐん八ものかのおや が清十がてとにつき侍もた
ゆうみととおもうへ「それからうこそまわくこちへ
「いやもまうりようつもきま見せぬてやとうにうちうとその
ありそのちと見そよるおきみまうりにむつひ「あさのくへ
まだらくあのひとふへ「のちさ母侍もどのくうへつり紙まち
才(は)さうひとも(あれ)だまうらバあれ「ことみがふらしへ
刀代さがてゆりにかりぐん八はかてのちがよう清十が紙
のためぐし「サア おゆいぎ叱二きめかみあずけまうしさ
あづうりてうらうかそでにさまや是「おうてるのうるそとよへ
りゆあがら ちあにようしこう あがくるまくのあのでも

「これくりやがん八はまだかいな あそこの清十郎がこのひとじや

「あのがん八あおらのかせ

なにがしもものいゝぐさじやげなむかしから女とおんその
おまへがらをあかへでんぶんそらしかるる此侍七バ
女房でござんせぞへおぼえおまへのいゝなづけとられきて
くるのをまちかねのおくさまとどうしさまのぢやわしもが
あらふそれいかんせとおりとむれだがん八はせつらいかひ
「おまへとひいふそなわけでもこの清十郎は十ねのとうぞく
ぢや「そとびつくり「それきもがつぶつまするくゝせの
らすかちよろまはしておさへとつひめちうだんむすめ
くまでせうがないてきずかつかのわけのでととがかんせんおまど
せんぎさうまやあれりのせまち入てとのへさと
ぬすりとろそんなことうち入のですがあらうとぶつつけたれば
それはあのとあとりさもあのいゝつくどおすなはそのばかて
いろいろとりあげておやくくられずまでつめうらしさかうを
肉へおのそのばくだんとうがきはめつけひとれつわしらの
おやくそのつまりくんあだいそれでおうけめきてあるのじやと
おのれがあくをおしくるものかだぞおそろしき
あきれはてゝアンゴかよりすけがさ一くいとりいさし
「がん八どのばくされおがんがあるう「こりや清十郎が
かきおりやがいらきがうえとしさ「されいばさきの
清十郎さんのけされてござるさはきのくさあてもの内に
あつさおち入のせうかんとおりえてたてそのおもうをがよふと
さしいでさてうちでござる「それを見なそれとのらくへとくれ
みつせてせんそのおもうと清十郎がさうあれだ「それぞれて
けるいアンゴうくんこれをとせうとがらくのとうぞく
はずがこそぬとおしのけてひらつまとあげさせ
おちてわがうがらん八あそのつち
あがよふこれどもせんくさるく
あれとりあげてようとくぶさを

つぎへつゞく

まへのつゞき ○一のぶらいのきさき二三し六千五十貫の
あきなひにより手にはれる品あり三千日のゆうげん
きれいさむらひ内へ一切入まいらせ申まじく候
よつてせうめんぐぜん乃どし清水どのお手形の
あてなよろしときいておきなさいませ「それでも
今夜のしゆうぞくか「イヤ今夜のしゆうぞくでござるは
いさみのしゆうぞく「それはやスてるぜん「されどさ
とぢまや へあちらへくさのぶらいのきさき今夜に
せうとて清水どのがぬきんでれちがひかいなぞと
いかれ多代わらてつきる身ぶんで刀をちよらげさる
すぐもなくそのうへ出てゆくなおりてれえきる故
いやがりおるが清水どのがぬきんざとのさしきま
せうこうじごう あてお○よぢするのぞとといわれぬ
けげなつけこむあく あんさいぜんよりひとなみで
きてそこへそこらる本にけるうこてへかすてそち
いわれぞ清水とのへびらくらじ「ヤアちとえいわのまに
「これやめへてる下女いのまうぞ「五三がん八十両
清水どのがあちら入せしにそれがしがいゝ人ぢよつぶの
のぶらいもおされるられやきむれ三日月のうち





わたしとかつて三日月丸と
名のれよんで世にも
まれなるめのさくのの
とぢまやれあよぢせしも三日月丸の
のふたり一両それは「いやこころ太ぐるりめ
あへ見せぬぞとうきよのつらおのれのきさまの退件七
えせいつてがん八分のきんのふんでりんどうらせ「それいく
にてうさなちそうとちへかつとせうれあらもうとぐちで
ゆるさんのとしび きてまづ さがおへ てそらへは清水さまの



おまへにあいぬます　おもちがへにあづかれませうく
いや爰にがんばつてしまひともあかして扨れお
侍そこを見てびつくり　両げんしてするを侍ぞが
「こりやがん八　文十郎お殺しておけ」と
まちがひの太十郎をそんなにことし
切りしてそこそこに　かかる所　侍ぞが
がん八まちかね「文まてうひの
身にはしさう「イヤらいひ覚がある▲

▲清十郎さまにはとうぞくのおくまがつけしさを
まつやとのへで「さてはめんどうな
ことしてとうとうかかる故　侍それへはくぶんて
おちそのくどこへがんだくり　なげいだしぞのの戸
ひらき切り「りりりりりし」べつあうづの
うくて　米「はらへ　おのれがさしうる太刀を
清十郎さてせそ上る殺しておけ」「たかうは太田殿
おきつかされ　むかしのきみつひあつつまって中でれ
なくれども　清十郎は世のをさめのがたりの御奉公人
ますます手の家の名に　くよぞのえんぐみん
まるみれさまの　おとうさま八十郎のおんさまの
おもやじ　殿の御息さまのころのおとしにおんちて
八十郎さまの前さま六十郎出てぜんまやのらあれ
むどうのつきびて　おんそうまでそのおもう　それがしを
ひそかに同じせずれ　ぞうの願いをまず　ここに
そのわうられ　とりたてて世にいずして
元気ようして　おいのちあり　しでゆいかん
せなんをもちくるお前ゆへ　それがしが
せがれ　といいつまり

[つぎへつづく]

「もし　はつはう　あれ人の　いそれ殺　はなし　清十郎に　いわんする

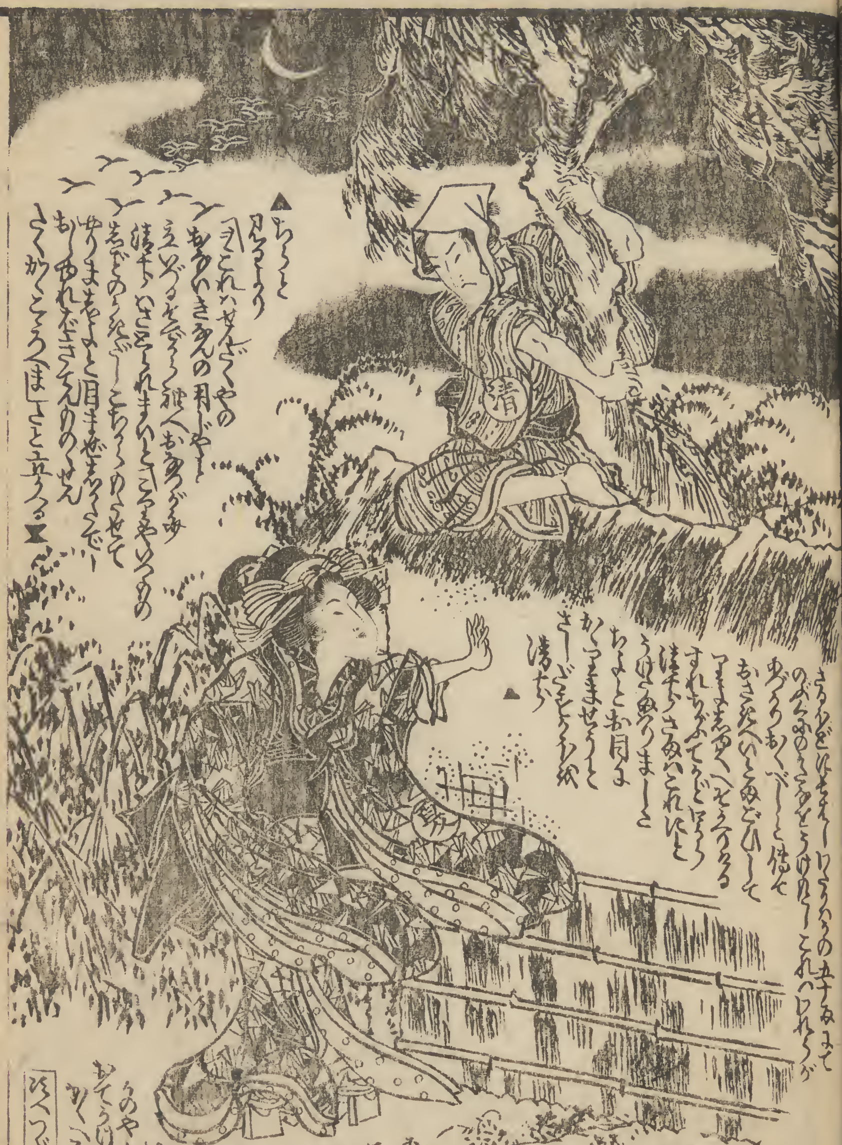
「がんと　ひとまし　いひつけ　あい　はげの　あやまり　そこへ　くりかれ



おそぶてやせし　けふ一月おかまはりてんねんじん
えびぞり　お身のうへもきづかひ女人田君とこんりやうせて
いきのびたり　傳七どのはおとこぞと　させんのかの
つねよりおもひるましいまで代がらをこそ　そのうへに
ぬれておかまはぞえじやくして見るへてみの
あんちうくの　あんまさこ　百月九ののぶあうせで
ましうへたなたんさきこへますせなわるへの
おちどさかよぞのそれんぞうえんさなれおそふか
すらかへ去らかれようてっ　おちかじしに
おられまいかの　でそもすいらせんぬ
あたゝかへいつの紙きろうとおつしやる
おりまをれぬうきとちつきの　いろん
清十かれましうもれ
ゆるしてくだされいつりどのと
くちぢわれる　藤のとがう
さすがけぞうくろへかかり

十三味水晶粉（すいしやうふん）一つゝみ壱匁二分
薬あらひこ　山東京山製

けしきをまやうれいかれてつやがいでし
さんぶつくを玉のごとくにするゆゑうけ合
つるれ用ひてひろを志らしゆきおちのびてとて
ゆゑん○ゆきひそかをれはし○びでんさけん
そうぶん泥をとる利ありてあばくゝうしくへ
のりがたれ
ちるせり
右京傳店にて商ひいたし申候



▲ちよつと見るより
ヤアこれハ
清たち
ちよつとお月よ


まへのつゞき

▲こゝの そこを
ひごにかゝる
わたるうと
ふろへるひまへ
おふろへよりそれ
ミれるかませ
「よふまるきいて
らぶえんしためやく
ろうへわぐれへおい
あのよくづるかりさん
ぐんぶがしへ出たしてます
そのお手元へせいとも
出るとゆくてくの百両に
渡さんの五十両をそへて
ころさへさむらのが来てに
きてねまるとこうかにせある
ロしかこのさく「おまへはりれ
てへとそてぬぬひふがんと云て
つれての足そろぶさんせこまやくり
あがするちうまそでこ「ふたりれぬ
そしどりのかうのねずみの
ひとらがひむそのかぞせあせあれ
清七もおましくおふのぶへへ
らちくませて「それはうるへ
まちうれんじや

おくへつゞく

「まへのつゞき」女六よすべて玉のこし
きけおちしときハおやのだちでおき
よろこびにまよふハ
あれてわるとぶあせど
すゝせどおやとぎの
こびゝすぢみがんのゝの
ゐまますおそだせかもがゑ
○清干ら八ゐわりも
おかゝ「アタリい」とした
どうくやうさへ申くさまい
「いやまうし八金兄ゝせぬと
こゝのことられぬてこそり
そしのなんすめのごくなり
そりうこさゝ南方さむそのめの
めのじ」ぶ合うあれハおやぢ
さ母と二ういのせうじをうつとおり
きさ兄のぞけべめんどうの
ひくりゐてうきとおやのうれ
あうぞびつくり身とちゞあ
「さてハおかうどかくあるへ
こちの弁一兄のくのさねうと
みどびつくりは
ひや汗をせを
うくくんおうぞ
あづけ」しまうり
母くそくの
ことをり
あてくさん
百両は水金卒まで
こくゐそろへて



▲せいだんがきてとうぞぞゐ「いやかりの
おくさまにさへいのかりしおかしハおあつ
あびでもきられと
おうしかって日あんのいやとかしませう
「それうれぞそれ」うまくがからでもかい
身どもがきもじんかおくがき
いかゞゐとぜんとかしまちハあくへ
やうくのお女中
ぶらじとことあう
おそぐつて
敵かって
玉のこし
むすーの
ことぶ
これ
あって
いろ
どゞぜん
とも
きを
やさへ
まな
その
さは
ひ
より
けさ

おつまうしやきゆうしあつて
うけとられましてふくさん
のせておかゝ母さまかで
まへはおけでよくに目のおい
ちまでだてゆふまつはせう
けのそくけも人おがりりく
こうやあのうがてうりてでき
まとさかまう娘おまうへ
「うおりもハけしさが目がへ
人目ちてそりうがあればそれが
これよりせまてあへつり
かゞのようはもそての人て
又かむかの女にまかるべし
それまでにおかゝどの人
そのくとやてかれもけいぬ
わかく人やうさへさうしけれバ
きゞくのようはもさそござる
「いやかのむさめへたや御その
おまへのうちもよしお目よ
かくさせませうと母がいうて
二人のうちおかゝのそばて
きうハやくけてうハ母の独分おく
「イヤモたゞうお目にかゝりさとよくも
でらくやありてこゆ也ませう
さそまづおかゝどのとゝ命うにやうさく
さ一わげられだおそまへハだんくハも
どうぞれちとおりりてあさのこゝやイろをそぶ
でざるかつこゝもきさバよふまいれだ
でーやまでの人のぞこまでういうなどくぶらぞ
よのむこさいをごぶんせまへくらう▲

せうくとこしてくらよろつしうそ
くゞ又はとりのかまちんのおそおうけ
あくやくおうくづさまおゝそうやらく
されぬそのゆめやく（あやめとふらへるこまと
せうんひとハそのゆとふてかさまうにおうがへ
おのぞこまそく二あのとあきれなたぜ
こうして丁ど十七ばかりかやあかのまいうそ
おかのうぶよろくへさそのゝなり

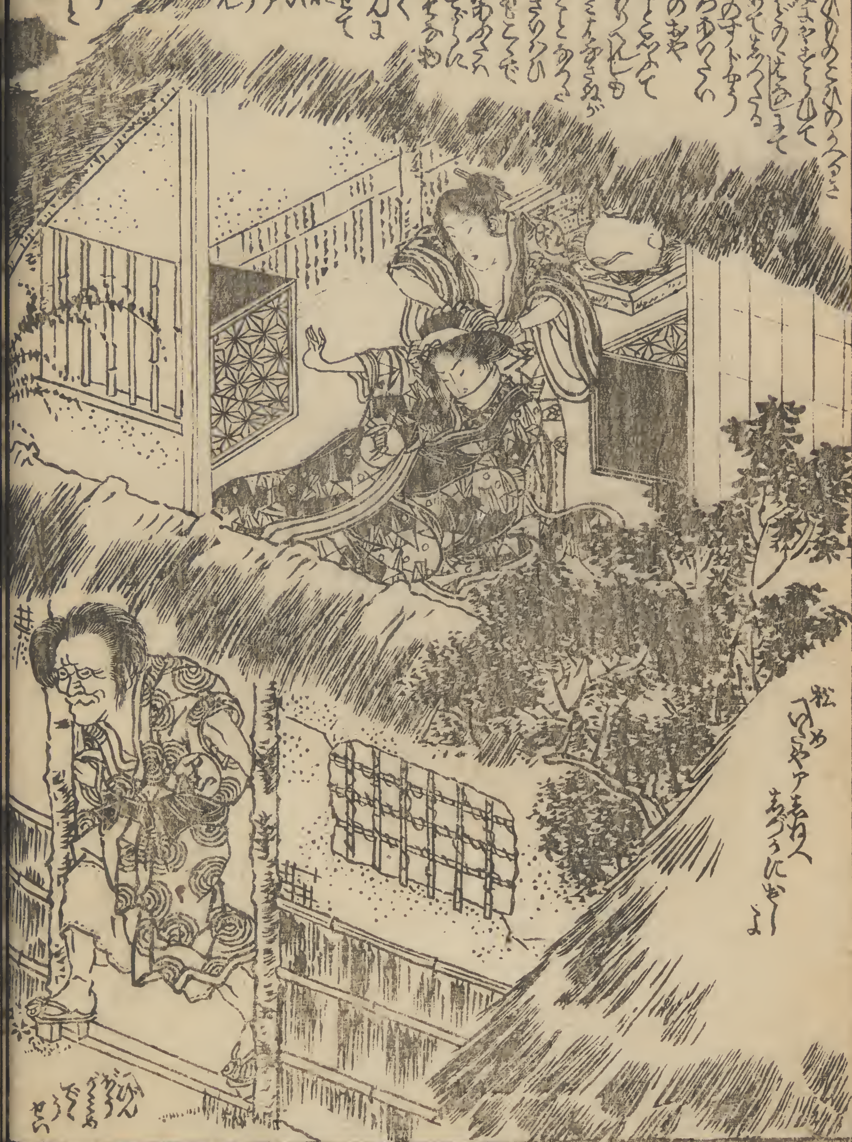
女の子くめんよくせまうとそすら退まをそつこ気そくさまありぶらのへそのそのゆくさつけゐまろく二才八月吉日ものうくのさん生トまる退こうを

かくなりしも
おりての戸を
めんめんも
あくからま
とあけ
のさくもる
ひめんのすぐさ
むすめさうのを
よしやと
すぐい目のくの
うつくしさ
様まとげの
あつてらくごびのきさ
おやた松助が
女がさうと見てよりう
おやうが母の
くらうのそれとく
まんあかさへとあげ
「おのれやされどや
あんりのどや
金をもあつうう
けさとさうへ
ごまうて大へ
おすしのかう
かくごひらけ
とうさいられ
あのあを
でたをと
さうそに
もち
つゐて

されバ弟をひかりひざにひきよせ、まづひだりのりやうへせなかあく刀のゆくふたひとおそてつれ合をうらむと女が云へどもけ用やまゐるまじ　おさむらひ　え　まゐりやうが　なんを　かどに　そりうかと　めんぜと　びつくりさせぬ　ぶつつんかつて死ぐぐよすてぶひ　かうそ刃んくりうハ刀をおさへて▲

▲目をふさいでおくへり女ハころびつを　とすけおそう　「これおたさん　それをききりがば女きさがすうかぶくしへく　せなとたきされおさんせりうれはさうの　のえどれよおもうとめへの女ひやんおもひがゐるさ　そのおもふひとえあせだあがすう　ハとうてふら　はまりぶくろの内よりうしがうきうれさ　へそのかうえうけ見され、なをじおそおまうると　りだをみへかつのふところまゝかり　ハうりハ　これとんかうりひまをとてぐさんがうりぶさを　おそのかうとうけよ

「あろく二年八月十日の巳のこくのたんせう　トよんでびつくりをれしらまうり　「さそハゆるさがいくほさ女の事をあで　おれも叔でござうはしさろ「されださ　おさかくとそのおうれうんぶう　おれと　いゝのゑんを　〔つぎへつゞく〕





▲おさと
をわしハを
あつとひ
してくれ
にいつても
りんきさんは
あまとうさ
「いやのう
やくぎてまへ
あされてもおとともやさふやあうま女ね
「これろうづらどのとあくこの身でおれさみに
お目にかゝつてまつへ出ろそりとあてこのでもつくもしませんせん
とうぶ女ハ者ともがらこにあるとわしとこのそこせられば
よく此月のあハそろづうくおれくゆハらのつハぜうろうくくつれく
わのくらハよろこそをまつてもござりましこれまつてゝどちそうの
げいしゆうもわるのふのにあにとりよれもござらぶあの女へおそまつで
ござりますちやくあくひきろめずるにとせすましてわあくせアさんの●

せてゝうハおれをろろづまそのこ
のちわどあろつとごおもいやうえ
おともやさんとおらぬいとつれてきてあり
ろうづらハわハしでしくその あわれの
二つめくあう［いくつづく］

「あさけ
こハ
人じや
きつ

●ちさらいハ
とんあり
ごてよ出よし
おちとのくさる
えんぎりあまうわ
出がらい一文くきや
あやくとおそし
まてう
ころ
ま
え
おぢ
ひとの
きのはじ
さうじえ
出つるぬ
わりくお身り

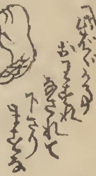
「こん
えん
くく

まへのつゞき

おかうと清十さんがゐりくぢつんでひさりおつし〽ぜんおうやまとみそおのさびんやうれとしぞうてこまひやうにおもちせぬへ大それさどめんなりかもおきまもおるおそゆるれれどうまうゆゑうてへあづさりかのさびうをつけてへそんが

ゆくこれお松さんねこのうゆへさるぶるまおのつゞらくがうてんり〽ヲ冬へてとろきうらづくほよまおめぐひうそそそでゞらのあへもしこんでうへうちおあるうんおがうくそのまゝれうつゞうふらんざぬるさ

〽おふくさらんれんへうまのこゝんでかるよ



●うらつゞき

清十うとまろ姿ろそゆそう姿を入れさゝのうけさらあふさびろのやへれぶをさとうといひけさへおうぬでうるおとぶ外多くおのそのうろへおものぶ二ね

○かくてわがすく者たり一まさりうそ人わあて匹つれて二ゝのゝすのゝさせさせ多うのむちひ渋きさうれわれだろづらへなぞむうひ〽これかく〽いうあ半るびさりまし〽されいでゞぶるお松さん女のあうりで出されて女子ど入〆のおまろこびいそのどぶんでへでぶしぬてやとくおにおあさゆものへとがれみとかれてさをぶのぶらうつゝおゆそさへのりつふかのひらくつゞらのとくおまりぶきとぶきされどこまるどもそとるおれがさそく〽これまさりおあうへ者さいあつて出つゞらの中よぬるてびつくりへのうとおいさへのまけへ母へよ〽巳がゆるそいひまませう〽まうやなりのうてあのそや〽まうくへおまさうくあさされませとこそくぬのとと娘がへてみかれかぶ、ふしたの雅おゆのあさゆるおそれさうさうぶるてらぶの玉びくのみてゝもーかまるのてゝもんうゆりやおさうへぶまうれうのかられつでらやたりさ〽巳よとしてへおれへのだくゆてさたのなくへ花もおがそうとやるさとさーでかぜもゆ見ゆく

山東京山作

歌川國貞画

筆耕 橋本徳瓶

彫工 田中仲次郎刀

出世娘後編

さるほどにおかくしつかりは
うんざりおまえとおひのあさねに
あいそのつかれにのせてあねさ
とおん人をよびぐへさせ
おまえをおつでらへやる
まいにてよぶ
らくしんの
あいだよ
おかせ
かのうし
ざしきへと
いそだ
はるが
のりものを
ゆうすじして
わらえさがり
でらを
おひつる
あいだともみき
みてれうちよせ
いひつけれだあいだへ
うめつきのこころんでてらを
せまいつきたぬけてゆくへは
あいまでさかり▲

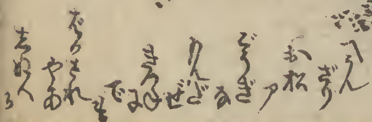


かくてこゝろへうへぐるお松が
ひどんねんつき「イヤまうし
お松さま、ちくもナくわり
これはかゝしで、ちまをの
お月はちらゝへちがひ
またそれへ思根でせん、
でさのあんめそだつさう
と「アレさおまへハづひ
かまうぞしらえ
「イヽヨセうちの女どよ
もんどかさんかそやいや
ちつとやうなりんドヤア
ねへよういれにちうえ
のゝつけねへかゞんれ
のうてもよひびひらく
するやうござちうとおうて
あるこうドヤアねへう
「いゝさおいらいへ
かちゞげでも「なんざ
ひあよしゝ未でも
こぼれてゐるのも
あきらしをおもひをで
ひゆんのおまへ
小そで遣ちね
こしらへつきかそへう

「ごまかさう

あのじやく

「うまねへ



そこのびくにかれく
のうくしにさかしぐさ
となりつゝとめぬかて
いりかけて見ればとこかさ
のひめんざや「おの〳〵
ろんぎりおれどやアねへら
そのかりかゞらのかみぐさ
「ヲのかざこのかゑぬり
これめやアどうざれ
やらてわァ
なんでも
きゞよ
わを
わらそ
おひめ
さまは
一ねへ
のみせそ

やらうぞとどげしてのうそ
わゑらゆやうかしきの
おびのおくびろうびざれ
二百かげびし女ひふんと
ゆうそのさうのり
りうつまきよと
つげゝろ



かくて
まつりハおねは
むかひあまり酒が
すぎますとみへて私
ごぜんのおそばへも
いくどかおきなくあ
られたりぎ
やんちやと
すねるてだ
おれん女の
ひあんよむかひ
「そなたのくえな
うちまでおれへ
のきづけに出さ
まいばくでと申きく
さぞできたかくのしつ
かくそくなせへと

「そそうくへ
うれいや
のう

ゑんぶがめぐり
はいかいくと
つべきまゑ
ゑんがとつぶる
たまあり
それがやうれ
ひしがし
びやうきおやうの
しあいらつり
はしよろへの
出あうおぐうも
まづ申一ハ
ゑんがをさぶるで
りずそんかけて
うちまをえとし
次ハこうたび
むかしおもしれ
おれよ女郎をあぐる
おみをいうりかくをと
しせよいむまくそ
おやすがあいぐさ
めいどらし

のりおへのりうつり
かしこまりしてぞ
いそぎゆく
おとこのくびどころの
わとりまいとれば
こころうれしく
のりおのくま人は
まぜつきてれがすみうち
岩ねぞぜん乃かいざしき
おつとせうちとめる所を
ここりおねにこびかつ金
うむれいなせぞさるぐつを
こうそこそれいましめて
いつもがまへおぞひれ出しぬ
ここりいつもがまへはまとろき
おれせにますせてうけがうそこと
いつかりつれきさりたるおのおかつ
さるぐつはとんみせしへヲておいらばは
こそへ人さぬさげでうれし
のう男はうい次人そかしてまつさとと
あぐちしは次のはら母へあきりそおのんだ出うそを
うかだひかる岩ねでぜんきあうそくおしのけおれがかわれ
おまおり「かるかどきて」にまうさるおかみうざさるまさう
ひろつけてもねつくましいかにおかのうんだちへかきそこ
たんぐんさ母こうしのにれまをつけてこうつまかくして ※

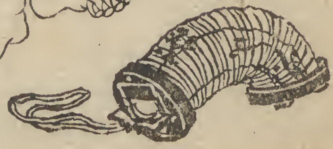


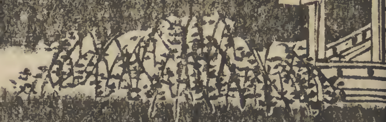
▲下 きいてお松ハ身とあざれどもそれと
いわれぬざちらろをにはむしせんハけいくえ
おしめハさいハわかんなるくりの
ゑぜんにとゞまらく由しも井の六入ハ
かつぎかふしよりかくて鬼にえろのそくさ
立いりすりさげまっての大男らりを下ふ
目をぜすれバそれところへお松がたぶさ
ひつつかみいかにおもつもあれと公証に
かけてあめそれいりてえきみのおむすめど
お松さ身のおもわれあらく与念くらくせ
どんびしりのおかなけハやまとざ
かくだせとよしとなさるびのさきおちろをも
お松ハいつしやうけんめいとおいくう
いつぺい身とわざれどすめのひいのかれず
たんそをそえみすぎまもびんも
かりろがしかくへそてらてわをあだの
ゑぞとつてひしおのみくらご第さんの
めくしんが此身れむてうはらうしさ
そのえらうんあにまてうちくさかわ
あるぞともむしだまわしせねるもの
ものがいのちいちてきんしといりまがおも
う逃げぬれハあねいに目まいとかそ
「ヤイ ものろうんがそのよ瓜ならるそも
あのふいのうれどその百六目さしお内に
ぞんぶつのやわしつけお松ぶあんてやい
おやこえハ今さらもおとさたのかげか
うしやませんせうてハそれとうのしとれ
たやくめハどんいきやいのといりさお松が
命しとさかくのの
いのちかちまよきびしく
さるぞっておけるへ



○こゝに又清十ハおとろへつゞらの浪人
今まで此所へ来りしときてせきとも
きうへかねを見せしかのしこざきの
えて来り世の中をあきりて
ひろひぎ世へてん
「さてゝかけ
かなしくも人
いゝかり
いゝ子の
くるが
あゝ
ん
よ
み
ゐれ
も
むかしへ
おしとし山
そこのちんしとを
ゆらへ身がかくおちてゐれし
はきがさはりがいくんを
よそひして傳七がうちと
ぬけのぞゞきまわ出かが
あわされうて上八まゐると
おわりが無むしが寄せそ
出くとの三世出けて
かせいひし
おなんつよ
りつまて
かれとのミ
とんどので







なまけ
こいと
おれを
ごおろしと
ゐまそ
のび
あゞりく
見る内
せきしへ
ならと
ちうちう
「そなとのや
ときつめちつき
そのまゝ二つ
ぬれ
なな
ち

おゑ
ひより
へ

せうぬぞしと
すでれあなりき
そのあへなろ死
でん七清ホゞが
びんきをあんし
こゝへかけつけ見て
びつくりやアくまつさ
ちやまう手をいと
めいうき命など
さすけたり







「あれこなさんせ おかしく ならんで みるりのか かんは おしへ 男じやぞ

「あれど 見なさ かくまうて やろうぞや

「あんしや せう ぐど〳〵 にかのこ ころらぬ 男じやのよ

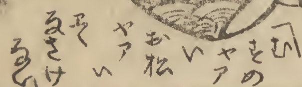
「いや〳〵 めつたに きづかひも ござりません

月窓写

さても手代がん八は ねがひをとつくひて 出はゐでぜん乃 うしろきえふげわがり 「今のこさまらへそんし ませぬがどうぞ かくまうてくだされ ましといひてあ きゝて女中たち それはかんがりさし つけて「見なれば町人 見かけぬ男がまゐて それはどうしやうさ まけしやところへ 出ねでせんきをつけべく それはそのがん八をひとの見 とくひろはせう そまつねがふてそ 女中ふむひかれまい こゝろくかぬせんき 乃まじわり まづこちらへ つましきたれ とさうてま ちまうひ がん八と 女中たちも とりかこみ びどしき ひとつへつれ きたる

つぎへ

岩根ごぜんハしばしとつくづくとせ
げん八とさしむかひならしうゑハ
ちからまのれおのしれハたづねる
あくさいありせバてへおじや
ゝてへ乃あのさろまげん八ハ
そときこまるくあくさひ乃
そなたへおどれべきやうでぜん
小さ衣れもり「おのしへ
くハち乃今ハ白井村の
らまれゐてあさるか
名をきくセしかバいへ
ざるそしとどられて
げん八ひたふりし
「あるかどおかせ乃
とかりなくセあで
ござりまするとハくむしが
君乃うへと「あくさ
あろくしあるさだり
ハしりておのし乃
おたじや此への事とも今ハ
げん八ハうちおどろき
さてハあのさんハくむしが
七ツ乃ときにおまうれ中れた
おゆうさまでござりましたらあそれ
今乃此おまへさ「ふしんハもつともと
ハへ十七乃としきくちの おのへハ
まかけおくちりふうへでおんとうけあへ
此君おそでへとおのひしれうさけかや
まくちさくをおまだくかなびハしハもれの
いやしきこ乃うへおつとのもちてむかしあと
まうけしやくきのあそのんしとやまれ乃



うくでもこれこれ今乃しのさぬおかしのきまよでの
ちんぢうさまのむすめの女　かうしてうつくし
ふうしたうでおもらつきそれかうずんく
きぬちせして今乃月はおしまれさ
おへやさまおくさまとそへ見へ
ゆへよ出るのでぜんと
うやまうかれたるづ乃かん
そのまゝ進ミきさへゆてこのかし
ざしちよ如中うじゆうそのさけへ
これらうしてげん八がみてれくち
つまんでさんざまとその月乃ちらぞそ
げん八へびつくり「さんあつしわの
おあうしくのぬうへおひろさまで
でざりましたうそれとへちつぱを
おうろのおぬけへいそやのうゝへてへ
きとのかださまおや　でざりませぬ
せめて此よ乃ハとおごのひとめあハせそ
ゝでさりませ「よふあけおあふでかま川く
あぢあれたけれとも今ハし御名　あぢらへ
かしこれがされどもしびのうお乃内乃
ゆぶのさんにつんざきがいととろくと見ゑそ
「ひろさぬおそせぶしといひしうかうてうう
おあつまいゆきれどもそれしをも見く女
あふぶ不乃ちぢみさゆゑうがそんぢうど
ヲそれくいうしうみせうしく此まのりト
そぶれうけさとどりいでゝしこやとれさしゝれ
清十ゝめぢおあうくへあんでさきしゆうであろもれがぐれ
あさぶハ奴母怒此ゆうなおへあいさいで　おあいひとあこう
つれあいゆうめとト　ちりてしのひいてまゐりの乃ひも
ものぞそうだまとへそのとれもろく二年八月十日
巳乃こく乃こんじゆうおさな名お松ともうしわり

次へつゞく



ぜん八ハがてん中つむじまがりかくろうとくちがふるく左りのてでと
わらたおれバ清十といふなおもきつてざきそへつよく人々がめし
あるその子が悪眼がまへおろかくのよりのがちうかの八そのその
かきつけをひく月とこりかのうでぜん八「ヤアこれはやお松がへそのそ
まかりなくとも同おがくあるワレがうらとさずるかしき
さそへむちあてあつくうそとひなうぶの唐人うけ合くちぶのよ
とりかきこゑとおげ「これやお松見えんしやどうしきとるの
まちがひうまるやおあつじやとおりのさ中をむさぼしい
ばかのでおきかハどきれ見られしゆく
舟しやせなくねへこつちぞへ
そうらしよがあさ
月がむしとめ
おやしこら
ちつむを
子ともと
ちつだ
舟乃
そし
づで
むへ
をぞ
まよ
か
け
こりもへ
いわれる
りんだしだや

よろこびところしかくさぬしらへてくれ
これお松むすめやあいりお松やアいり
お松くとよぶこゑにおやまの志のひが
つりじてやそでのきぬうちきを
まづせしらうんとひとさく目をひつき
〽それかくさんがなかりしへさるぐつうで
かのぶつかれもそれとあつてと
おやまの志なのりする子まつだ
ゆきのでむそいつれるへびそうよくと
なくもうられぬずんまつま
〽それならそれやくそんなら
母しとあつてらへのう
〽かくさんはあつまとしてあの
さむらひがいつて母へ志まうしう
おりのてらるのでかのものをいへさぬ
まるぐうつとうをとつてゆきうまませ
〽さそへたまりがさこでわつてうむらへ
毋のを主わざるお松へさんゆくいままのさらぞ
あらのらうのをかあしへのをむまいふそうるまえりさくさらひ
あく乃むへひとあつれそうかくとふんそまうりちやくしまそう
ひと母乃かしうをおいひうさ〽うまそのたくことあり〽る母ゑ
おむつを以つまりお松よのくお命をちぢめしへお母をうぐひさうんとまる
そとつくの天んおんその様をさつてなをうへまもさうぐちうせるあく乃
あへところづきおんをひるがへされぜんしんはいちらくてぞ

つぎへつゞく



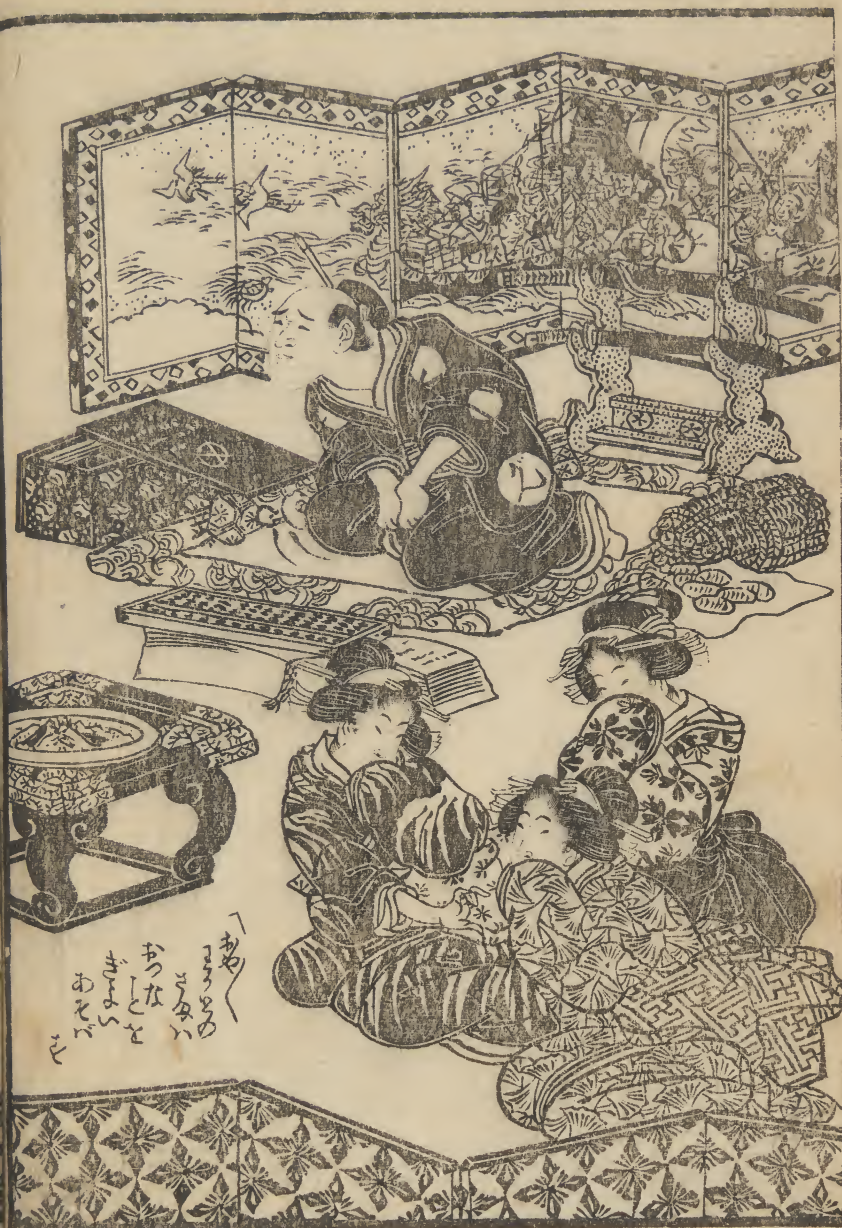
●しびさ一のぶれば
いつぞびせんこわりのうさま
ありあけでそひまれと
ゆつくるこうんひつると
男とくわせりしぎ一き乃
二くひよりものどくれ
そびくぶりおちて
おく へいまれざりなり





あかつへおいへのだいんさよさな
おれどのとうさせうるつちこうん
れとうり合ん
なりきめの
いざ
ごへん
しとう
うけ
とお
りんと
ちろ
しとも
おくせぎど
つわのすれば
「ヤアこざりーき
よいまへどもとめのうされ
かくとぜよ「それやかてまでも
でぶりまかぬおてうちん
らくごの生人と●


つゞく
「これおまちなされませ鬼王一つのちゑがござる


〽おやく
まうとの
さまい
おつな
ことを
ぎよい
あそバ
さ

「がん八さまハこれはきのどくと
なりやうりだんとうのかうき
ままあへさつする

「これはしようつう
ありました
ゆざうより
おちやを
わげろ

鬼「それそれ
こまつさ
であへさつ
おそれ
入ます
る
ござり
ます

「いやもふ
とんだわけの
さわぎであつし おいらが
たんきなおやぢがつまらぬ人で
こまる

まへのつゞき

わきくもつらし出来ぬ
できがんうおさもうしなり
ましくさせた乃でござりますだん
なにとしきりがおこしハよそ
お松どのハせうりしとも
がん八どのハがんぶら乃おもてと
きけバかやうくれもうしれ
ぬへといるはでせんまさてやけバ
「さりやがん八てもての悪と
いへはりいへいはれもしくお玉へ
お使もる付へそのさらまよん
おぢおん乃げとなりこかく
とうしもんかがかはらんおもうし
はさうりとうねとさらうれ
たゞなやのまーとんやさうのおい
がん八どのまーてんやさうのお
さなの乃おちやくしもへの悪さな
そんびりんさなにんおちゃどゆん
おんしくせうといふわんとのゆをと
うもし もつそのるのましての
えしの恐どのとおもへゆうだかうすぐる
けうかへえとのーやつさなまづくこれへ
上さまれなくてこーれてなりくれいでもまで
おくれめてよびいへし鬼團がひろくそれへ
わけはなしぶら女だてしわうてのさるまと

それハさておきこゝに又あしき月よりハあやしきまだ老ことのがれきたり
ひとまづかくへと身をかくし早くもこなたがんがくへかゝるときうへ
あとをおひて来ハぶらくへでし出おん乃かげもんつきまよひ
ともかくもすゝめんとれども出じん乃おもかげん
いぶちち鬼閻魔が関をえてもみよきまよふ
きちらかべーとおやせんくやしとおもひ
うちしきつる一刀のもとにかゝるをひきける
もしかまりりてでとと切つる
ころへまりしく身とうへせ

ぬき合せて
おとしとゞけ
月かげに
よくしそこ
「ヤアおのれハ
おり井乃
六之
よみが
しん西で
でうこ
せをとを
そのまゝ
けちらし
おさへつけ
▲

▲ここでも
はちまの
きこれ
あれバ
えどえを
ふうきも
お喜多
の
ためと

ひと
あがり
あげのを
あつと
えざん
けこと
ゆくも
あれぞ
おち
せき
なり

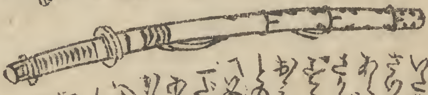
男ハ八ぞうの
あんぐ
せがれの
子
またさ
むざめ
だまし
まつれんく
そちの
悪じや
ぞ
いくびはねるに
おこすかれ

さるほどに八つ口鬼国男之助でぜんと
ゑゝしあはせかのげん八と申し、もあくにん
そとの悪ごのもいろあはかゝの国へ
つれきたりけんぶくにんどの人ゑんどかその
しうめんなりときゝれどゝもその
そのさまありけるにぞさて、りう
くれどもおの人のそしち
かゝさる松乃しんまつぎさじく
いでむ人だ屋代乃げん八申すへ下
こゝろが惣国をほ合ねりかへり
ひだしきざしたれきまつて
まあてそびれつきかゝる
鬼国がひやあせをながすと
ばかりなり
かくていよ〳〵でぜん鬼国
のあとをもげん八をゑさの
悪ものつかりなんぎさん
でのふこのあんさ近
男之助でぜん
なんぎさん
どのれむあひ
一口が君さまへ
ひさしの
でびやうき
もん
かく
つぎの冬さ
ゆさ
おくれが

あとへつゞく







▲さぞかしあんしん
ことまでしけいは
さゆうひきい上吉日
わくらみて
さりげきいど
どうぞおれが
しのきやうどうか

上下大小もどよめきわたりぬ
かゝるをりからちかづく女で
ござりしがさゝきはじめそれ
トてんとりわけしかいけれ
岩井鬼面がかほあはせあめ
ありしと目でしらせ
さばいたる岩井き合
ふかくつぎさる岩井が
しやくの手をとめる
おしもかれらがあらかた
こんにちハありがたい君
そのおさかづきをいたゞく
おひとへでござるおしかるうちに
松のしんさまへまいりてせひ上べきさ
きついわろをみえうけられまして
鬼面岩井をむすびこれがふたり
見ればどうらゝまづくさる
松のしんとしばらくおもんの
まへへとぞしそうなる
むかいにあわせの人は
しかもかけおくんだるんが
まへにすゝめる 〽この
ゆうハうけかれがしてまゐる
こゝろへしところへまへよ
引とりへ岩井ござんなれで
〽アゝ松のしんのてまゑをあの
今こゝでさけもいつそ
そこへゆきとのをおやきの
さかづきをさしあげられたおりへの
めでたいねがふかんのふかきの
トまづ鬼面さしよつて 次へつゞく

主人のできごゝろ〽いつぞやのよしあひ
じやくものゝ小ざむらいでござ
じやまひろぐなそこのけ〱
きりさとてきたとちからあり
おうけまたをやくそく人
らう人こそおんしう打てゝ
さあとの鬼だまりの
どぜんとしいとびかゝり
見るより松のしんい
すでにもさうぜんと〽いやさ
それおさへいかりてけも
ぶろうさとのあつかりし両がう
土とうりちからそのへうちとぬかる
つちへんざやうどうおちどうと
なるおりしやちのくねまれども
松のしもへのうでをするうへ
ところへかくごをひやうきらせと
まて阿国のおかげをひとしく
おさもしうくこのそこのりうゑん
えぞとりしあゝそのうちとかゝうち
これは伝六けさてもつれぬおのその
ぞんへ鬼国よしいれおしやれさト
でんぜうの乃おゝのかくさうゑんの
松乃しんおいのひらぞそのとき
鬼国やおかれ目とのとき〽ヤア
きらてとてかゝ松乃しんせうかる
かりうのりのすかくのまかしと
おのぜん乃かおけれその鬼
ぞのそのかりしいうねだうれ
〽かのくしかうそにはとてとう

〽たくそのだれ
ロくらかねぜん
へつゝかの
三日かまへは
こゝづかうかりつ
りり
あい
これは
せうこの
ひと
こう
見れ
ござ
鬼ゞ
とされ
とと
おられて
ひかね
の身へ
おび人ね
でいそ
うけまく
ぜん八と
松乃しん
さびかりを
ところおさへて
ようそくそ
円ササのせあの
大ごの鬼
まつとぐれ
らくどやう

ぬきさしならぬそれにその盤どの松のしんハ
さかさ乃てきおハやへじやきおいにしても
どひドすいをかくし目と人それをきを
がんハハぬくまゞ忘ぬうきおのつミとをかけ
これども言ひ今角「こてあゞハうやこゑ
かけしれこんくおどし切つける松乃しんハ
岩とひし きあふぼぞかうちおとし
がんへを給らあげて主かる鬼王が
まへつ刀とつきつけて▲

▲やさ
のしん
さな
今ハ乃所
その悪どの人
おやぶんのりしハ
三日月丸おやのかたきの
一ミうれざさとへとはらく
なさりしとも人きれりつるたづも
あし君へおドかそてかんざんすかさしつまあり
よろべき不びおかれこゝあへかるなみうの
あみうつぶし乃ふしゝあせうと
ト

せよと
刀のこおり
きらきらされバ
「アヽヤ
ままを
ゐかく
こらくと
ちく
りちう
ぐらる
さらあ
ずんく
松のしんハ
うくとこゆう
「こそ大鬼宗
岩のぜせん
銘をあつむく
はりへをうがれ
とひんさここうか
命をりとあかざれ
めんがへ切まあり
くるんおんせよと
ぬきさすあし
すぞんてらよを
こえてるおしも
まんぐうんどのへ
さいぜんからの
ぶドにんも
うけおきていく
ろくにもりかの

次へつゞく

まへのつゞき

まごろもとてもしばしのあひだくむらく〳〵とおこさせてこゑをかけ
「ヤアヤア清玄どの松乃しんおてすてらんちゆんにはなしあんちがちかぎりも
あら乃あん「さてハワが君「そさるんがら乃やまひもとよく〳〵ありがたや
引うけるやしと袁をすへし世をすへし持びいさむ松のしん
打あれたるあんどんどの「これにつけても
おめひだまと八んさのあんがむざん乃さいご
けがんハがまよふのえしよの恋まで
あるあしべかさくとうがせんのあるに
こしのあとれはとつけてかりつかし
ひろを水のあてへいづく乃うれ
すむ井うんひもしとおへ
めもあだしめぐるこゝろも
うすれあんたてまよふぬ
うき世じやさうやア下られいを
ふくむあての心のうへおひかけるれ
むすぶれるその身さあひある
めうとおんとせいとせし
岩えしけるそれへすのさん
ほうんと夏ハきちかけかあと入
清太ハ手下岩瀬乃ボをじかう
両人さ二人ときんは立
くらいづるもそうしける
えんがえんがまくれ
まさらさおまた
こしのあとも
にやどるし
おとしだは
清十ハ
八まのしん
とのく
一子







〽さしもの
しやうぐん
三日月丸
すけつねは
のお国がらを
ちんぜいせん
とあれ
さしもれ
おんよび
なかつかば
へめがしき
三日月丸ハその
あんまのこゝろを
ぬきとつてわがものにせんと
刀のいきほひはしんをそへて
おしやる三日月のひかりを
まぶしがりておそるゝおりから
ひとつ家の内より「ぎうらぎつてかけ
玉さしがんせんしおれ
なんぢとこゝにてかくれて
みとゞけたるはかまのうちより
とゞめて「太とうがいちぞく
さぶらふ五位乃太夫
わすれげよものせんせん
ぜひなるはぜんざいくと
よりてまつていちぞん
のらく左右乃おとな
とゝのへて出でゞ十二ひとく
こなたへ罷出小まさをめて
ちんぶせんとうて身をそこめ●

●〽さぞかし
若とのさまの
女とあり
今みし
ことがらと
ある
ふしぎを
見せる
男
それからて
とりおとしも
さいごを見とゞけ
一ツの手にていのちが
すべてまれにいざうち
おふるまでのそりて
さだめんとありんがへの
やまいもの
ふうけとこゝをもけ
らいやうまでしへのる
二人が年来さりまく
あるじいまつのとおりを
松乃ちぎ忘れ給ふゐる
まゆりんのちーのかたへ
ゆきちらまで方にて仰る
うちおいてせんぶせんが
つかとつるうへぞとぬけば

次へつゞく


岩
清


鬼
松

山東京山作

歌川國貞画

下にいへ〳〵まれなせる事ぞとさしづのさいはいかうむる
松のしんちよしハ清玄おろかゝらさもれ思ふまゝ
いろ〳〵とゝりかゝらんべと見てぎんぬんやらをしやうこれハ
きくちのてがらまでるきけをとうけしあわじん乃あと
みそれがん大ともののその一ぞくのこらくのおちぞならぬくと
おもひしにつてるんだんたをられしおわんのつばまくれりの
ぐみひ玉ぶれかさらでゆえさしくさゝぬかまがありのかなひ
かくでひろげしと切つるんハやさけれなふれさとせひどうろ
つまだのこぶれやきつるま二人がゞーどめのさうでけへらえ
おさまる付つ凪ゑなぶんせひしとゝえ〳〵へえり
○岩ぼでぜん思正おろびかれかよで乃い入まろく
おさまり清玄がおさしくえんらきんがおのぶして おすのへ
すめうち おそろしぶ ぼあへ出けがし とふらへと云り
めでたく つがそしゅとあのうちて 清十おろ男ハお也の名を
そとのぶきうられ そひお名をもあらむのあるゐなし
ちうぎのゝのくかとんをわらくあへ参がしおんなるが
ますく母とよろこびいそしてのおもてゆふ妙あ伴をゆふあのあの
清玄 まへとさふゝし刀やの由恵まさきをられ〳〵の
おんしゆうやうびのとふさ喜ぶなりしひへ松のしんゆうぞ
さしぐ喜あうのつぎさあがゝ元也世紀のふり 袖日記
めでたさをむかえけりめでたし〳〵〳〵

